

地域自然観察会活動全国交流会

「自然観察会ゆっくりそして一歩ずつ」研修と交流の集い」

地域自然観察会活動検討会

代表 **本多 孝**

大阪府

全国で自然観察会活動がはじめ出されて、20年目を迎えた。この間に自然観察会の知名度は、向上し、参加する人や開催するボランティアも増えてきた。

これらの自然観察会が、何を目的にしているのかが、問題となり、私たちは、自然保護教育としての自然観察会を打ち出し、他の観察会との違いをはっきりさせてきた。

しかし、自然保護教育を目的にしてきたものの、現実には、理科教育の延長であったり、レクリエーションの一部になってしまっている現状が浮かび上がってきた。どうすれば、みんなが元気に自然保護教育の目標に向かってがんばれるか、検討することとなった。

自然保護教育を目的とした自然観察会のリーダーを養成するために20年間開催されてきた、自然観察指導員養成制度について、問題点や今後の課題について整理することとした。

全国11都府県から19名（東京都1名、長野県2名、愛知県1名、三重県3名、滋賀県1名、京都府1名、兵庫県1名、徳島県1名、香川県2名、大分県1名、大阪府5名）が実行委員として、参加し、1998年7月19日、8月30日、大阪で2回の準備会議を持ちながら課題整理を行なった。地域で自然観察会を開催しているものが中心となって議論し、財団法人日本自然保護協会の自然観察指導員制度の中に反映していただける部分があれば、持ち帰っていただき、検討していただくことにした。

この実行委員会の会議には、財団法人日本自然保護協会から、中井達郎普及部長も参加していた。

だった。

9月12日-13日の2日間に大阪で、「集い」を開催しました。関東、中部、北陸、東海、近畿四国、中国、九州から、60名が参加しました。

まずはじめに財団法人日本自然保護協会の村杉幸子事務局長から、「やさしくわかる自然保護」の講演をしていただいた。次に地域自然観察会活動の報告として、「身近な団地での自然観察会と自然保護教育」長野辰男さん、「吉野川での自然観察会と可動堰問題」井口枝子さん、「海上の森での自然観察会と万博問題」曾我部行子さんの3人から発言いただいた。

パネルディスカッションでは、地域自然観察会活動の報告者3人に財団法人日本自然保護協会中井達郎普及部長を加えた、4人にコーディネータを今井信五さんをお願いして、「自然観察会から始まる自然保護」について意見交流された。

その後5つのグループに分かれ、2日間にわたって分會討論を延べ5時間30分かけて徹底的に討論した。

その中から、どのグループにも共通して、いくつかの問題点が浮き彫りとなって現れてきた。

◎各地で、自然保護運動に対する、指導員連絡会の対応が、「自然保護運動に対して否定的だ」という指摘がある。今回参加した、多くのメンバーからも、そうした意見が出された。

愛知万博で活動しているメンバーの、悲痛とも言うべき指摘に対して、この間、自然保護協会は連絡会に対してどのような、対応をしてきたのだ

ろうか。自然保護運動と、一線を画そうとしている連絡会をこのまま放置しないでもらいたいという、参加者の声に答える作業を、緊急に求めたい。

地域での自然保護の輪を広げるサポート作業は、自然観察指導員講習会で、自然観察会に取り組み、気づいたら自然保護運動の最前線にいた、という指導員に対する最低限の責務だろう。

今後の問題としては、指導員連絡会に対し、ガイドラインを提示すること、各連絡会の運営メンバーに対して、定期的に全国の自然保護運動や、自然観察会活動の現状について報告し、協会の考え方を伝える機会を定期的に設ける必要があるだろう。

◎指導員についても、講習会以後放置することは、許されないだろう。講習会以降、そのフォローは各連絡会に委ねたままになっているが、協会が責任を持ったフォローアップ・システムを構築する必要がある。

自然保護に貢献する活動者としての自然観察指導員を、現実のものにすることで、他団体の人材養成講座との差別化が図ることもできる。

フォローアップ研修は、自然観察会の有能なリーダーになるためのものは、当然のこととして、自然保護運動を担える人材を作り出すという視点も求められる。

そうした意味で、現在の研修会では、十分とは言いがたい。

◎分散会で指摘のあった、協会に変わる、指導員の相談相手として、本来は、普及委員に、そうした役割を求められるのだが、自然保護についての相談でも対応できる人材の登用が必要であろう。

自然観察指導員講習会や研修会、出版など収支バランスを図ることは、普及活動と事業との両面から考える必要があるが、厳しい状況を打開する運営資金確保の取り組みとしては、事業としての

位置付けも必要ではないだろうか。

そうした意味では、委員には、事業に対しても意見を言える人であることが必要であろう。

課題として4つのことが整理された。この「集い」の中で、指導員がすること、NACS-Jが出来ることを課題整理し、講習会の問題、フォローアップの問題、地域NGOとNACS-Jの連携の問題、連絡会の問題などが上げられました。

それを受けて、財団法人日本自然保護協会は、1999年1月16日の全国自然観察指導員大会で、次のような考え方をまとめ提起した。

「自然観察指導員についてのNACS-Jの基本的考え」

財団法人 日本自然保護協会

NACS-Jは、生態系をはじめとする生物の多様性を各地域で保護（コンサベーション）し、持続的な社会をめざすことを目的としている。

そのための手段のひとつが、自然観察会とおした「自然保護教育」である。

NACS-Jが考える「自然保護教育」のねらいは、自然保護の考え方を普及し啓発することであり、自然保護の行動力を引き起こすことである。

そのために、人々が、自然に親しみ、自然を理解し、そしてなによりも自然を守るための態度を身につけることが必要である。そして、このことは、自然とそれを取りまく社会から直接学ぶことによって可能となる。

そのための有効な方法が「自然観察会」であり、「自然保護教育」の中で、「自然観察会」が果たす役割は非常に大きい。

そこで、NACS-Jは、「自然保護教育」の担い手として、「自然観察指導員」養成し、その支援をおこなう。すなわち、自然保護を理解し、広めるための自然観察会のリーダー養成である。

◆指導員のあり方、指導員の役割

このような考えに基づき、養成された自然観察指導員は、以下のようなべきだと考える。

- 1) 指導員は、地域の自然保護教育の担い手であること。
- 2) 指導員は、地域の自然や文化に根ざしたものの見方、考え方の確立を常に目指すこと。

3) 指導員は、人と自然との関係、および人間同士の関係において、生物の多様性の保護と持続的社会的実現のために適切な対処と行動がとれるよう努力すること。

4) 指導員は、自然保護の実践者としての専門性、自然観察者としての専門性、指導者としての専門性を研鑽し続けること。

◆自然観察指導員連絡会について

また、各地に設立されている自然観察指導員連絡会について、NACS-Jは以下のように捉えている。

1) 連絡会は、上記の指導員が主体となって、自主的に構成され、運営される地域の連絡組織である。

2) 連絡会は、主体である個々の指導員の活動を促進し、発展させる。

また、課題整理を受けて、「自然観察指導員制度を軸としたNACS-J普及事業の展望と課題」(案)をまとめた。

財団法人 日本自然保護協会

NACS-Jは、これからも、理科教育でもない、レクリエーションでもない、自然保護のための自然保護教育の担い手である自然観察指導員の養成になおいっそう発展させたい。

それは、仲間づくりであり、NACS-Jは、自然観察指導員と協力して、日本の自然保護にあたっていきたい。

そして、仲間である自然観察指導員個々の活発な自然観察会活動とそのための自己研鑽を期待する。

そのために、NACS-Jは、つぎのようなこと

を考え、実施していきたい。

◆講習会

- 1) プログラムの見直し
- 2) テキストの見直し
- 3) 講師の養成

◆フォローアップ

- 1) 研修会のプログラム開発とその実施方法
- 2) NACS-Jと指導員、指導員間(地域間)のつながりのしくみづくり

◆新たなニーズへの対応

(自然観察指導員養成の枠組みで対応できるものと、その延長上の枠組みでの対応が必要なものの両方がある。)

- 1) 学校、地方自治体、企業
- 2) 母親
- 3) 自然を対象とする他団体
- 4) 自然環境コンサルタント など

◆上記のことを実行するための内部システムの整備

- 1) 普及委員会
- 2) 事務局

以上の点を、1999年度の取り組みとして、行われることとなった。これにより、地域自然観察会活動検討会の主な目的は、達成できた。



第1分散会



第5分散会



地域活動報告



パネルディスカッション



全体会



全体会の様子



実行委員会打ち合せの様子